から15歳まで

～その発展の秘密～

司会　今日はお忙しいところ、どうもありがとうございました。善光寺も開創して十五周年を迎えることになり、今月の二十八日、身代り不動明王の大祭を期して記念式典を行うことになりました。併せて、今まで星野老師が編集しておられた『拈華』を今度は六十頁ぐらいの冊子に改めようということで、創刊号が大体、八月末頃に出る訳なんです。

そこで皆様方にお集りをいただき、善光寺がこれまで大きくなった底力というものが一体どこにあったのか、あるいは、皆様方と善光寺の方丈様との出会いとか、それからまたいろいろなエピソードもあることだと思

●座談会

善光寺0歳

お話くださった方々

善光寺婦人会会長・善光寺檀徒総代伊藤喜三郎氏（伊藤建築研究所々長）夫人
伊藤初枝様

善光寺婦人会副会長・善光寺檀徒総代西島一郎氏（西島産婦人科病院院長）夫人
西島昭子様

善光寺婦人会副会長・善光寺檀徒総代中村治雄氏（防衛医科大学教授）夫人
中村茂子様

善光寺住職
黒田武志師

善光寺監寺・山梨県大翁寺東堂
星野直隆師

司会者
山形県宝泉寺住職・前大本山総持寺副監院
佐藤俊明師

います。そういうものをお話ししていただき、しめくくりとして、善光寺は今後どう在るべきか。皆様方善光寺に何を望まれるのか。それからまた、婦人会として、今後どういう方向に進んでいったらいいのか。こういった点についていろいろお話を伺いさしていただきたいと思うんです。

では会長さん。方丈さんとの出会いについてお話ししていただけませんか。

伊藤　（笑い）……そうですね。

司会　方丈さんの困るような事も遠慮なくおっしゃってください。

方丈　全部困るようなことですね。会長さんとはね、大先生との出会いが最初なんですね。今から十八年ぐ

らい前になるんですがね、昭和三九年の十二月、インドに大先生が癩センターを設計されて、その竣工式においでになる時にご一緒だったですね。伊藤先生とご一緒に四大聖地をお参りして、その後私はタイで修行して日本に帰って参ったんですが、そのタイで修行する時に、大先生が、「一生懸命、頑張ってくれ」と言って叱咤激励してくだされ、タイのバンコックで一杯飲ませていただいて、それがご縁でタイでの修行から帰って来て大先生の家におじゃましたのが、会長さんにお会いした最初の出会いだったですね。

伊藤　そうでしたね。それから、そろそろご縁談のお話がありましてね、それで度々行ったり来たりということで何度かお目にかかって、結婚式にはお仲人をさせていただきまして……

司会　結婚なさったのは何年でございましたか。

方丈　昭和四十四年の十二月です。

三十二才でした。タイから帰った時三十歳で、それからアメリカに行くことになり、アメリカから帰って来て、大先生にお仲人をしていただいた。それ以来、ずーっと…

司会　そうですか。ずい分長いおつき合いですね。

伊藤　はあ。ほんとに長いですね。

方丈　会長さんが四十代でしたからね。今もお若いですけども、美しいでしたよ。やっぱり美人に生まれてくると得だなァと思いました。

伊藤　〈笑〉ありがとうございます。おっしゃっていただけるのは方丈さまだけで……

大先生にお仲人をしていただいた。それ以来ずーっと……

司会　西島さんはどういうご縁ですか。

西島　私はそのあと。結婚は伊藤先生御夫妻で、そのあとの……

方丈　〈笑〉始末をしていただいた。

西島　はじめはこちらの方丈様っていうこと、私ども全然存じあげなかったのです。それがあのーお寺さまの奥様が毎年のように入院なさるということで、

方丈　ようにじゃなくて、毎年なんです。

西島　それで、また黒田さん入院よ。あら、また今年も、というわけで、続けてお子様をもうけられました。奥様のお産も軽く、いつも順調にお巣立ちになられて、お帰りになられるんですが、一度だけ、何番目かのお嬢ちゃんの時にお彼岸にぶつかったものですから、赤ちゃんを連れてお帰りになっても、お忙しいという事で、しばらく赤ちゃんだけおあずかりさせていただいて、方丈様が赤ちゃんをお連れにいらした時に、受付けでお話しなさってらっしゃるお姿がとても印象的でした。

司会　どんな風でしたか。

西島　声が大きくて、受付の人達もびっくりしたような顔してまして、それが一番印象に残っております。そして、そのあと、父が亡くなりました時に、この近くの曹洞宗のお寺ということで、どちらにお願いしたらいいでしょうと、葬儀屋さんに伺ったら、「お宅でお産した黒田さんがそうなんですよ」ということで、それからずーっとです。母のお葬儀もお願い致しました。

　そしてたまたま釈迦殿の建立にあたって西島が建設委員長の大役をお引き受けさせていただき、落成式というところまでもって参りました。その間におきまして、主人も職業柄仲々忙しいものですから思うようにお手伝いもできませんものですから、私が婦人会の方で何か少しでもお役に立てばということで、婦人会に入会させていただきました。そしたら早速副会長なんていう大役を仰せつかって、なんかほんとに何もできないんですけど、伊藤様、中村様に助けていただいて

今日まで参りました……

司会　中村さんはどういうご縁で？

中村　そうですね。私の実家の父親が先代の御住職様にお世話になったようです。当時私どもがアメリカに（主人が留学して）おったものですから、御葬儀のことはよくわからないんです。あの、出席できなかったものですから。で、戻りまして、方丈様もタイでご修行なさり、またアメリカでご勉強なさり、たいした方だということで、そこからご縁がはじまりましてね。普通のお檀家様以上に行き来をさせていただくようになりましてね。いろいろ教えていただくことも多かったんですが、たまたま中村の母が具合が悪くなり、御葬儀のこともご相談し、また、とても立派なご葬儀をここで白純ご老師様をご導師様にしていただき、たいへん身に余るご葬儀をしていただいたと、ありがたく思っております。一番の親孝行が最後にできたんじゃないかと思っております。

方丈　中村ドクターに、御前（開山白純大和尚様のこと）の主治医になっていただいておりますから、それはもう親子同然のおつきあいでした。

方丈様、ホントに努力なさいましたネ

中村　それでまあ、十五周年おめでとうございます。ほんとに感無量でございます。あの時のことを思いますと、方丈様、ほんとに努力なさいましてね。いろんなことでご相談を受けましたが、それに助言できたかどうかはわかりませんけれど……

方丈　いやァ、皆さんのおかげで……一杯飲みに行くところは大先生のところかドクターのところかで、大

先生は「あんなまずいものどこがうまいんだ」って飲まないんです。ところが、中村ドクターはニコニコして、「飲んだら病気がなおる」っていうんです。

司会　皆様方ずい分長いおつき合いなんですが、長いといってもわずか十五年です。それでこれだけ多くの檀家をかかえるようになった、その原動力ですが、これは中村さんがおっしゃったように方丈さんのご精進のたまものだと思うんですが……

中村　それに魅力があるんですね。ですからこうしてお檀家の数がどんどん増えるんですね。私にしても両親がお世話になり、それがご縁で方丈様とおつき合いをいただき、色々と吸収してまいりました。ほんとに方丈様の魅力でございます。

伊藤　やっぱりそれじゃないでしょうか。なんか魅かれるものがあるんですね。

西島　とても良く気がつかれるんです。うしろに眼があるんじゃないかと。〈笑〉　それはもう実によく、微に入り細にわたって気がつかれますね。ほんとうによく気がつかれます。

司会　また奥さんがいいですものね。

伊藤　あ、奥様もね。

西島　それはもう…

〈笑〉

伊藤　やっぱり奥様がいらっしゃるんで方丈様も自由奔放におできになる。

司会　ほんとにあれだけ内助の功ができれば、ねえ。

西島　そうですね。

うしろに目があるんじゃないかしら

方丈　会長さん、副会長さんとまるで同じじゃないですか。〈笑〉

中村　ほんとによく落ち着いていらして、またこういうお仕事は誰にでもできるっていうことでもないですからねえ。

星野　確かに、方丈さんと奥さんは「琴瑟相和す」っていうか、非常によく調和がとれているということとそれから、この方丈は、「倫子」「倫子」でねえ。朝から晩まで倫子でしょう。どんなに倫子さんがいいかってことがわかります。

方丈　いやァ、言わないとおこられるもんですから。

〈笑〉

中村　いつかね、何回言うだろうかと、家にごめん下さいっていらした時から数えたんです。十何回位はありましたね。ほんのちょっとの間にねえ。

司会　七年前、方丈さんといっしょにタイに出かけた時でした。帰り香港に立寄り、ランタオ島に出かけました。旅行中はじめてのんびりして方丈さんといろいろお話したのですが、その時よく「倫子」が出るんです。奥さんにはまだお会いした事なかったんで、どういうお方なのかな、と思ってましたが、お会いしてみて、なるほどこりゃ言うわけだな、と思ったですねえ。

方丈　いやァ皆さんのおかげですよ。これは会長さんに仲人していただいて、会長さんに本当に大お手柄をなすっていただいたんで、私としては皆さんにお尽ししなくちゃ申し訳ないと思って、日夜努力をさしていただいております。これまでに十五年でさしていただいたということは、これ以上の嬉しいことはありませんですね。

司会　方丈さんの魅力と精進、それにもう一つ大きくなる、大きな要因になったのに、ナリスとの出会いがあったんじゃないですか？その点のことを方丈さんからお聞きしたいんですけれども。

方丈　昭和三十七年春、駒沢の大学院を出て総持寺に修行のため上山安居し、九月に送行（下山）し、十月に永平寺に安居しましたが、四大不調のため一ヶ月で

送行して全国を行脚しました。そして十二月に師寮寺（師匠の寺）に帰りました。すると、師家（指導者）養成のための特別僧堂が開かれることになりましたので翌年の春第一期生として総持寺に上山しました。そのつぎの年、昭和三十九年、夏季摂心の時でした。本山の日曜参禅会の会員でモラロジーに所属している松木盛人という方の紹介でナリスの社長さんと今の社長さん、営業部長（今の常務）の東郷さんと、もう二人お伴の方で五人がおいでになられました。その東郷常務さん、平素あまり坐られないから、足が痛くて動くんです。「こりゃ、動いちゃいかん」と警策でひっぱたいてひっぱたいてあげたですね。そしたら非常に怒りましてね、帰る時に、「先生、ちょっと来てくれっ」ていうんでみんなのところに呼ばれましてね。「先生、質問あるけど、いいか」というので、「どうぞ」といったら、「先生、悟りとはなんだ。それを教えてくれ」というんです。わたくしは即座に、「悟りがわかればこんなところにはいない。わからないから修行してるんだ」と言うてつっぱねたことがそもそもナリスとの縁のはじまりでしてね。それからナリスの社員の方に坐禅を教える事になったんですが、その次の年特僧をやめてインドに行く時に、お金がなかったものですから、ナリスにお金を借りに行ったんです。それがナリスとの縁を深くしたんです。「成功したらお返ししたいけれども、お金を貸していただけますか」といって、ナリスにお邪魔をしました。社長さんが「いくらいる」というんで「一年位修行するんですが、まア五〇万でしょ

悟りがわかれば、こんなところにいませんヨ

うか。半分でもいいです。成功したらいずれお返しします」と申しました。「じゃ、考えよう」というんで別れたんですが、その後「用意したから来てくれ」っていうんで、五〇万円をいただいたんですね。それで、タイに修行に行って、インドに行って、またタイで修行して、帰ってきました。それで帰って参りましたところ、高階管長さんの秘書をやれといわれ、高階猊下の秘書をやっておりましたが、もう少し修行をしたいと思って今度はアメリカへ行く。アメリカへ行く時も社長さんが私に五〇万円をくださった。それを禅センターに御寄附を申し上げて、今度はアメリカから帰ってきて、新寺を建立したいと物色していると、ここに長光寺という非公式の小さな庵があって、それを建てられた林方丈さんが亡くなられて、あとどなたもまだ決まらないというので、それをゆずっていただきます時に、当時のお金で六百万円近く必要でした。これは建物だけで土地が入っていません。それでナリスに相談に行って、一千万円をいただきました。一千万円というのは大変な金額ですが、当時は、一人一口三百円で、六百人の、その当時は六百人はいないで三百人の社員でしたかね。それに四、五千人のセールスマンの方ですが、その方々が一千万円の御寄附をくださった。そのお金で土地を買わせていただいた。

司会　えらいもんですなあ。

方丈　まあ、そういうわけで、順調なスタートを切ったおかげで、ここまで早く伸びたのです。それでこの寺をおゆずりいただくことになってから、伊藤先生が、さきほど婦人会の会長さんもおっしゃられますように、「もう、そろそろどうだ。いくつだ」といわれるので「三十二才」と申しましたら、「嫁さん貰わんといかんな」というんで、お仲人をしていただいたと、いうところが、そのスタートのですね。ナリスのかげの力をいただいたんで、一気に花が咲く原動力になったんですね。

司会　伊藤先生も、先見の明があったですねえ。

伊藤　やっぱりこれはご縁ですねえ。

司会　伊藤先生、その最初の出会いはインド旅行、これも仏縁ですね。

方丈　そうです。在家のお方は大先生お一人でしたからねえ。あの時、大先生がインドの癩センターを設計なすって、その竣工式がなければもう二度と大先生とお会いするチャンスはなかったですねえ。

司会　ほんと出会いって大事ですねえ。

方丈　そうですね。この善光寺が大きくなったっていうことは、出会いを大事にさしていただいたことですね。これが善光寺が世に脚光を浴びる原動力の一つですね。

司会　その出会いでもう一人考えられる方が佐藤さんですか。

方丈　ええ。佐藤達太郎さんという方で、父親の代からのおつき合いで、そもそもこの方がここ（長光寺）紹介してくれたんですね。

　といいますのは林方丈さんが父親の勧めで長光寺をお建てになりましたけれども、早く亡くなられた人です。この林方丈さんに佐藤達太郎さんがお手伝いをしたんです。というのは、林方丈さんは総持寺の知客（しか）といって、いわば営業部門を担当してました。父親はいわば副社長をしておりました。佐藤達太郎という方は水道関係の出入り商人をなさっておったんです。それでそういう事で親しくなすっておりましたから、林方丈さんがお寺を作るならという事で手伝いをなさいましたが、さっきも申しましたように、林方丈さんが亡くなられ、「そのあと誰もいないから私にどうか？」と

やっぱりこれはご縁ですねえ

いうことで、ご紹介をいただいた事が、ここに参る因縁となったんですねえ。

司会　そうですか。方丈さんの出会いの中では、お集まりのお三人と、それからナリスの村岡さん、東郷さん、それに佐藤さん、こうした人達が主だった方々ですねえ。

方丈　あとは地元では石屋さん。非常にお助けをいただき、ご援助をいただきましたけれども、最初の出会いというのは、そういうようなところでございましたですねえ。

司会　人との出会いはそれくらいにしまして、次は方丈さまと仏様との出会いについてお伺いしたいのですが「身代り不動明王」とか円空仏とか、その他たくさんの仏像がございますが、それらの仏様に助けられてここまで伸びてきたという大きな力もあると思うんですがね。そういった点で一つ、方丈さん。眼に見えない仏様の力についてお話していただきたいと思うんですが。

方丈　日本を一周、行脚をさせていただいた時の体験が、僕としてはひとつのものの考え方の非常に大きな基盤となっているかと思うんです。日本を一周しました時に岩国の、あるお寺に泊めていただいた。そのおばあちゃんは字が読めないんです。勿論、書くこともできません。そのおばあちゃん、喜んで私を泊めてくれたんですね。その時に、あんたにおみやげやるからというて、五センチぐらいの木の観音さんをいただいたんです。これが、仏様を正式に自分で勧請するというか、おまつりをすることになったんです。

　それで、日本を一周したんですが、その一周した理由というのは、ある時、やくざがたずねて来て、「やくざをやめて足を洗いたい、助けてくれ」というのがそもそもの修行の原動力です。警察に自首するよう、おすすめしたんだけど、どうしても逃げるというんで、有り金を持たせて北海道に逃げさした。さてその後どうなったかという事もさだかではないんですが、逃がして非常に後悔をしてるんです。生きているのか、殺

されたのかわかんない。なんとかしてあげたい、そのご両親にもお会いしたいと思って、日本を一周修行して最後にそこのお家をたずねたんだけれども、住所がでたらめで、詐欺だったんですね。詐欺師のおかげで日本を一周した。私としては、人生というのは容赦しないから一生懸命生きるんだ、というような事をしみじみ感じました。その時、道中岩国で小さな仏さんをちょうだいしたんです。次の年、総持寺に安居いたしますわけですね。総持寺に安居して、三年目に今度はタイ国に修行にゆき、インドからタイ国に行くという時に、三十歳になりますのにいまだ何も残していない、世の中にですね。それでタイで修行中、万が一何かあった時は、これは、親には申し訳ないけれども仏様だけは無事に帰れるように念持仏を作らしてもらおうと思い、一葉観音といいまして、道元禅師が中国から帰られる時、大波で船が沈みそうになった。その時に「念彼観音力」と観音様を念じたところ、一枚の葉に乗ってる観音さんが天から降りてきて、波をしずめて船の難破を救ったという、そういう逸話の仏さんに接する事ができて、これを自分の念持仏にしたいというんで、はじめて私が仏様をお願いしたのは昭和三十九年の年でしたから、十九年前ですね。はじめて自分でお守りする観音さんをお願いした。そのお願いに行った時に「あなたはどこだ」というんで、「目黒だ」と言うたら、「目黒不動のせがれか」といい、「このお不動さんを、あんた、どっかへ持っていってくれ」と言うんです。どうしてそんなことをいうのかワケを聞きますと、或る日この山口という彫刻師のところに四国の霊能者がたずねてきて言うには、「不動様が、突然夢枕に立ち、福井の大きなお寺のふもとに彫師がいる。その彫師のつくった不動様をお迎えしろ、と言われるので、はるばる四国からやって参りましたが、お宅に来ておどろいたことには夢のお告げと全く同じところです。どうか私にこの不動様をお授けください」という。しかし、山口さんにしてみれば、どうしたものか、どうしてもその霊能者におゆずりする気になれず、おこ

とわりしたのですが、それが気にかかって仕様がなかった。丁度そこへ私が行ったものですから、「どこへでも持っていってくれ」というような言葉になったんですね。そこでその仏さんをお預りすることになり、大

お不動さんをお迎えした御利益ですね

きな仏さんをお迎えする一番最初の因縁になったんですね。で、そのお不動さんをお迎えして、光真寺におまつりをしていただくことになり、私はタイへ行って修行をし、帰ってきてアメリカへ行って修行をして帰って来て二年目ですから、四、五年、光真寺さんにお不動さんをお預けしておったんです。アメリカから帰って、これから一生懸命まつらせていただくというんで、光真寺からお不動さんをお受けしたんですが、そのお不動さんのおかげですね。このお不動さんは、身を七つに変じて、私が困る時は必ず救ってくれるというお告げだというんで、そのお不動さんをお迎えしたことがこの寺が一番大きくなった御利益ですねえ。

身代り不動明王をお迎えする時、私夢を見たんです。その夢というのは、総持寺が燃えてるんです。こりゃ、たいへん、ということで、先師と共に、先師は総持寺顧問会の会長でしたから、案内して総持寺に行ってみると総持寺は焼けておらず、勅使門のうしろの長廊下の中雀門のところにお不動さんの台座だけが残ってる

んです。お不動さんが身代りになって焼けて総持寺を救われた、というお告げがあったんです。それ以来お不動様は、善光寺に関する限り、常に身を変じて、どんな願いでも叶えさせてくださったと、私は確信しております。

その後、総持寺に国際部が出来たりして、タイなんかに行ってたくさんの仏さんをお迎えすることになる。それからもう一つは、円空仏ですね。これは伊藤先生からおあずかりしているものですが、これ笑っておるんですね。それで、大先生も気持ちが悪いから、お寺でお祀りして欲しいといって、この寺にあずかることになった。この仏さんは、「日限り不動明王」というて、一日に千里の道を行って帰ってくるという。召し上がるものは洗米に芋ですね。じゃが芋、さと芋なんでもいい。芋とこんぶを供えて欲しい。いうことは、それは災難よけだった。大先生は設計なさいますし、そういうことで災難をよけられる。それからキウリ十本食べたい。赤飯一升食べたい。これを二十八日にお供えする。その代わり、一日に千里の行程を行って必ず帰ってくるというお告げだというんです。

それから霊験あらたかだというのは、中国の七宝焼の仏様を、これは、病気は絶対しないというお告げがあった。その仏さんはお姿は観音様だが、薬師様のはたらきをなさる。それから大先生（伊藤喜三郎先生のこと）が文部省の或る上の方からいただいた中国元朝（一二六五～一三五二）時代作の聖観音像をおあずかりしました。

それからタイの仏像、実はビルマ仏ですが、これは銀座の新田ギャラリーの社長から、仏像を引取ってほしいとのことで七躰を勧請したんです。

次は大黒さん、これは光真寺の檀家の方が彫ったものですが、先師（御開山）が、「お前のところは何もないんだから持ってゆけョ」といってくださったものです。

それから、いま釈迦殿の建っている土地、この土地を購入しようと思い、開創十周年記念行事として写経

一万巻と聖観音様の勧請を発願したんです。聖観音様は高村光雲の弟子で、鋳型では第一人者の沢野盛一という方に制作を依頼しました。高村光雲が七十年前に聖観音をつくられ、それが出世作となったのですが、それを鋳造したのが沢野さんで、それ以来、沢野さんは高村光雲に認められて出世するんですが、高村さんの出世作聖観音像を三尺三寸に拡大して世に残したいというのが沢野さん一生の念願でした。その念願を、この土地の因縁によって叶えさせてあげることができ、その因縁でこの土地が手に入ったのです。

次に写経の方はお檀家の伏見暲さんの奥さんが一人で「般若心経」壱万巻を書いてくだされ、そのほか数十人で数千巻納経してくれました。その誓願力で土地が手に入ったのです。

さっき日本一周行脚にふれましたが、実は宗祖を通して釈尊に還れ、というのが私の念願でしたので、日本を一周して各地の仏舎利塔全部にお詣りすることが最大の目的だったんです。こうした私の願行に自然と仏像が集まり、また、蜜教に関する舎利塔がたくさん納まる因縁ができたのではないかと思います。

宗祖を通して釈尊に還るというのが私の念願だったのですが、たまたま新興宗教集団の真如苑でも同じ考えを持っており、従って仏舎利を奉戴したい強い希望を持っておりました。そこで私が、かつて修行していたタイ国のワット・パクナムに渡りをつけ、昭和四十一年七月、高階管長と真如苑にお仏舎利が奉呈されました。その時私も奉戴させていただきました。丁度そ

宗祖を通して釈尊に還るというのが、私の念願だった

の年の秋、タイ国のチェンマイで世界仏教徒会議があり、高階猊下と真如苑教主が日本代表で出席されたついで、ワット・パクナムに答礼にゆかれた。そのお世話をしたお礼として真如苑から、教主謹刻の涅槃像をいただいたわけです。

星野　方丈さんが確乎たる信念のもとに一貫して精進されたので仏様も集まり、仏様が見護ってくれて善光寺も発展するんですね。

司会　人との出会い、仏様との出会い、その素晴しい出会いに恵まれ、これをどう生かしてきたか。その辺のお話をおねがいします。

方丈　まず手はじめに日曜学校をやりました。鶴見大学保育科の学生、三、四人を呼んで、近所の子どもたち五〇人ぐらいを対象にして、はじめは前の庭でやっていましたが、狭いので公園墓地の広場でやりました。三年続けましたが、だんだん寺が忙しくなりましたので、寺の事業一本でやることに切替えました。

司会　檀家はどのようにしてふえて行ったんですか。

人との出会い、仏さまとの出会い。素晴しい出合に恵まれましたね

方丈　お葬儀などの場合、お金はいりませんヨ、誠心誠意やらせていただきます、ということをモットーとして実行したんです。すると葬儀屋さんや石屋さんがバックアップしてくださり、口コミで檀家がどんどんふえていったんです。もっとも立地条件もよかったですがね。こうして、当初の目標は檀家三百戸獲得。予想通り進み、次は五百、八百と目標をアップして、開創五周年の時は六百、昭和五十三年には十周年を迎えずして千軒を越えました。

それから寺は行事さえすれば檀家がふえるとの確信のもとに行事の充実をはかってきました。昭和四十五年二月節分会の行事をはじめておこないました。この時は光真寺から福マスを三十個借りて来て、光真寺の焼印の上に紙を張り、武志流のやり方でしたが、お客はたった十人でした。それが今日は数百人になってます。行事をしなくちゃダメですね。行事も単発ではなく継続して行なわなければいけませんね。それに問題は行事の内容です。善光寺では新年祈禱会、節分祈禱会、お彼岸法要、花まつり法会、不動明王大祭、お盆の大施餓鬼会、成道会等には必ず法話を入れ、法話のない時には、咄家を呼んだり、または福引きやバザーなどをやり、参詣者に、寺との交流、参詣者相互の心のふれ合い、そして物心両面のおみやげを持ち帰っていただく、そしてまた、寺に来てよかったというよろこびとやすらぎを得ていただくようにつとめております。大事なのは布施です。還元してあげることです。

司会　関係団体の活動も活発ですね。

方丈　小林寺挙法が月二回坐禅に来て八年になります。来年になるとダルマ面壁九年ですね。それからボーイスカウト、これは不定期にではありますが、坐禅に来て二年になります。

それから青年会・婦人会ですね。

星野　今年は婦人会がつくられまして五年目。その婦人会が段々として発展し、婦人会の皆さんが一つの喜びを持っていらっしゃるような気がするんですよ。そして皆さんの会員意識というものが高まってきておりまして、私は婦人会に非常に大きな期待をしておるわけです。

なんにしても家庭を動かしているのはご婦人ですよねえ。婦人の力が動いてくると家庭が動いてきます。そうしてくると今度はいろんな組織活動が段々にできて参りますから、善光寺が発展をしていく姿としては、片一方に青年会が動き、片一方では婦人会に動いていただくと、善光寺の両輪ができるような気がしますね。これは将来、期待される事だと思いますね。

私は婦人会に非常に大きな期待をしてるんですヨ

司会　それから医事相談で、中村先生がご奉仕して下さいますね。

中村　はい。九月十五日でしょうか、敬老の日にさせていただいているようですけれども、もっと利用していただいていいと思いますね。

司会　そうですね。寺で医事相談を開らいているなんていうところは、ここ以外にないんでしょうねえ。

西島　それにねえ、中村先生に診察していただくというのは、普通ですと、仲々できないことですものねえ。

ですから、こちらにお越しいただく時にほんとに気安く、といったら申し訳ないんですけれど……是非もっと宣伝して大勢の方ねえ、お年召した方がみて頂いたら、なおいいんじゃないかと思います。循環器ではねえ有名な先生でいらっしゃいますから。

方丈　それはもう、日本一ですからねえ。

星野　中村先生から脈をとってもらうなんてことは、普通じゃできませんからね。

西島　普通、表口から行ったら、順番があって、大変

中村先生に診ていただくことは、普通では仲々できないことですヨ

ですものねえ。

方丈　そうよ。まず半日は軽く待たされちゃうし。ほんとに、診てくれるかどうかわかんないよ。

星野　方丈さん、これはだいぶ先の話ですけれどね。幸いに二大ドクターがおられるんです。片一方は子供産む方でしょ、片一方は、お年を召した方のほう……

方丈　お寺で病院を作っちゃえばいい。

星野　それをいま言おうとしてた。それでね、わたしはね、将来ですよ、善光寺の一角に医療相談室か、健康指導室とか、なにかそういうものがあってね、この日は、善光寺に行けば、すばらしい、「医王如来」から診てもらえると、いうことになったらね。

司会　設計は伊藤先生。

〈笑〉

星野　その設計はね、伊藤先生が粋をこらしてこしらえる。そうしたら、いや、大変ですよ。それは横浜に大きな光を投げますねえ。

方丈　そうですねえ。

司会　まったく、そうだと思いますねえ。

〈笑〉

司会　では、どうでしょう。善光寺さんの将来のビジョンもボツボツ出てきましたが、どんな事を期待なさっておられますか。どんなことを望まれますか。なんかございましたら。

伊藤　善光寺さんに行ってホッとするという、やすらぎっていうか、まずそれが、欲しいと思いますねえ。今若い人は子育てに忙しく、まためまぐるしい世の中だから、心のやすらぎを得たいものです。私仏教の事はわかりませんでしたが、両親を見送りましてはじめてなんかこうお線香を焚いて手をあわせるということがやすらぎというか、何というか、ホッとする、そういう気持ちになってきたんです。ああ、やっぱりこういう所へ来て手をあわせることがほんとに人間なのかなっていう感じがしてるところでしてね。……これは年っていうものがあるんだろうと思いますけれども、若い人にもね、ここへ来て、ほっとしていただいて、

心を開いて、お話しできるっていうような雰囲気がほしいですね。それがあってはじめてみんなと仲良く何かやろうっていうことにもなるんじゃないかなあという気もするんですけれどね。

司会　それについて、方丈さん、どういうお考えをお持ちですか。

方丈　いま会長さんが言われるように、釈迦殿にしても、不動殿にしても、釈迦殿は、わたし手前味噌ですがね、本当に仏様が喜んでいるんだという、すべての、そういう荘厳（しょうごん）（飾りつけ）だと思っているんですねえ、それから旧館は、この、不動殿の方は不動殿でやっぱりお不動さんが喜んでいる、仏様が喜んで、皆を迎えてくれるんだ、と、いうようなね、なにか、そういうような感じだし、そういうふうに、ま、何か、こう、言ってるなあ、というような、思っとりますがねえ。

司会　伊藤先生の設計の釈迦殿はほんとに、やすらぎの場所ですね。

方丈　そうです。これはね、日本中のお坊さんに見てもらいたいと思います。いや、皆さん、まねをして頂いて、それでいいところを取って、将来の日本の仏教界に光明を放ち、悩み苦しむ人々のために、何か役に立つ釈迦殿にして欲しい、でね。そういうものを感じますねえ。

司会　毎朝ねえ、二人で一時間、坐禅してますが、実にいい気分ですね。

方丈　五時からやってますが、気持ちいいですね。

司会　本山の僧堂あたりでは、ああいう風にはできませんね。

中村　そうですか。

司会　はい。今度、皆様方にも、お泊まりいただいて……

中村　いやいや、とんでもない。

〈笑〉

星野　いや、方丈さんね。いま会長さんがおっしゃった、善光寺に来ると何かひとつのやすらぎを感じる、そういうものが欲しいと、そうありたいということは

ね、これは言葉は抽象的ですけれどね、なんか、考えなきゃいかん事だと思いますね。

どうでしょう、副会長さん、あのね、どんな事をお寺様にしてもらったらいいかという事ですね。我々も知りたいと思うんですよね。

中村　私はね、今までの善光寺さんが大変評判もよろしくて、明るくて、ほんとにここに入るとね、普通のお寺さんのイメージじゃないっていう、ことですね。それを、いつまでも保ってもらいたいということです

方丈様のスキンシップはものすごい―

ね。あのう私が、この婦人会ができた時に、ごあいさつに、こんな事を申し上げたんです。たくさんお寺さんがありますけれども、こうして善光寺さんにお会いしたことが、ものすごく御縁があるってことを感じたんですね。ただ御縁だけじゃなくてね、やはり、こう、あたたかみがあったり、方丈様に魅力がおありだから、それはずーっと続くわけですよね。だから、そのあたたかみが、寺が大きくなってもいつまでも、持続していってもらいたいということですね。

方丈　なるほど、そうですね。

中村　あんまり規模が多くなるとすれ違いが出て来ないか知らん。それはとても不安でありますし、出来るだけそういうことがないように。

司会　そうですね。十五年経ちました。これからは、守成（まもり）ですね。ですから、これからは、あんまり拡張という事を考えないで、内容の充実をはかって行かねばなりませんね。

中村　そうですね。このお寺にはあたたかみっていう

のがあるんですね。方丈さまにはおなかを割って話せるんですね。また方丈さまは、「あ、おばあちゃん、心配ないよ。そんな事はちっとも心配な事じゃないよ」って、こういう風にスキンシップをしちゃうんですね。そういうスキンシップが、ものすごい――〈笑〉

司会　巧まずして出来るんですからえらいもんですね。

〈笑〉

中村　その魅力あるバイタリティをいつまでも持っていただいてね。

巧まずしてできるんだからえらいもんですねえ

伊藤　そうですよ。

中村　そう思っております、わたくし。

西島　中村さんのおっしゃる通りだと思います。あんまり増えてしまっても、そのまとめるという事がすごく難しい問題になると思いますし、だから、今の現状維持で内容をどういう風に充実さして行くかという事が、やはり、ひとつの課題じゃないかと思います。で、まず、どういう事を手始めにするか、ということでございますね。

司会　ですから、何んか、こうやって欲しいというようなもの、具体的なものがあれば、

西島　あのう、今月でございますか、十日に史跡めぐりがございますね。ああいう事はやはり一番楽しみでもあるし、勉強にもなるし、一挙両得のような気がいたしますね。また、神奈川県の中には他にもたくさん行ってみたいと思う所もありますし、それから、また、あの、意外と知られてなくてすばらしい所がたくさんございますから、まず、そういう事から、ま、一ヵ月

置きにでも、まわるようにして。それは星野御老師様に色々、考えて頂いて。

星野　そういう会ですね。人が集まりますと会話ができますよね。楽しい会話ができるってことが、大事なことですよね。

西島　家庭のご婦人が多いので、あまり難しい事は長続きしないように思うんです。私ども、いろんな会にでておりまして感じますことは、最初に盛りだくさんにしてしまうのは、すごく結構なんですけれど、尻切れトンボで、続かなくなりますから、まず有名な所をね、回ったり、それが一番よろしいんじゃないでしょうか。

星野　同時に楽しいことですからね。

西島　はい、楽しゅうございますね。その行き帰りのお話とか、また、向こうでのお食事とか、楽しい中に心の交流ができますね。

伊藤　そうですねえ。

司会　そういうのもいいですね。他に何かございませんでしょうか？

中村　あのう、星野御老師様がはじめていただきました般若心経のお話、とても勉強になるんじゃないかと思います。あのー、仏教の言葉って難しいんですね。なじみがないので、少しずつでもやっていけば。

司会　皆様、大変喜んで聞いておられますから、是非、いらしていただけますか。

中村　はい、はい、伺わせていただこうと思っております。

星野　ご婦人の中から話が出たのですが、写経をしたいという話がございましてね、それならば写経の会も悪くないが、写経してお経を浄書する以上は、そのお経の言葉やら意味を知りたい、という事になりますと仏典研究になりますからね。ですから仏典研究を始めましたけれどね、難しい般若心経と取組んじゃった。これをもう少し別のお経にかえれば、大乗仏教の中には、面白くて、ためになるお経がいくらでもございますからね。だから将来はそういう別の仏典を皆さんと

一緒に読んだり考えていくなんてこともいい事だと思うんです。それから、今お話の出ました旅行会ですね、ま、研修旅行ですね、こんなこともいいことだなあと思いますね。

司会　写経会はいつごろからなさいますか。

方丈　九月、秋頃からやりたいと思って、おります。それから写仏もいいですね。伊藤先生が日本の第一人者でおられますが、大先生お忙しいですから、どなたかにでもお出ましいただいて、これも秋ぐらいからと思ってます。暮れになれば、歳末助け合い運動もですね、会長さん方にも骨折りをいただいて、困る方々に、色々な面で手を差しのべたいというような事も、予定しております。何から何まですべてうまくっていうわけじゃないですが〝念ずれば花開く〟といいますから、うまく行くのではないか、と考えておりますが。

司会　それから、遠大な計画、留学生派遣の構想の一端をお話し願えませんか。

方丈　今度善光寺のやるべき事は、大きくするのではなしに内容の充実だということです。そこで考えておりますことは、人づくりですね。今後、若い日本を背負って立つような方を育てて行く。善光寺では、万難を排しても、努力をしたい。いうことは、海外に留学生を派遣しようと思ってます。これからは英語ができないとだめですね。中国語も理解しなくちゃいかん。そこでアメリカ、中国にねらいを定めて留学生を派遣する。それから仏教の面からでは、何んといっても上座部仏教、日本は大乗仏教ですが、上座部仏教を軽んずることはできない。そこで、タイ、セイロンというような所に、タイを中心にして留学生を回したい。そして今後日本を背負って立つ人々をつくって、善光寺のためにいろいろお働きをいただきたいというような事を、再来年あたりを目標にしてやって行きたいと、こう思っておりますんですが、いかがでしょうか。

司会　それは素晴しいことですね。

方丈　金はちゃんと作ります。

〈笑〉

司会　それから、私、十月まではちょっと忙しすぎるんです。それ済んだらテレフォン法話をはじめたらと思ってますが、どうでしょう。

西島　それはいいですね。

中村　ありがたいですね。

司会　善光寺婦人会の今後のあり方でございますね。これにつきまして、皆様方、何かお考えがございましたならばおっしゃっていただけますか。もし、なんだったら、星野御老師から、婦人会に望むということで、お話しいただいたらどうでしょうか。

方丈　そうです。それを実行すれば、会長さんね。一番おやすいことですから、言っていただいた事をちょっとやればいいですから。

〈笑〉

星野　婦人会が出発してから今年は五年目になりますけれども、まだ入りたい方、何かご縁があれば入りたいという方はまだたくさんあるんじゃないかと思います。ですから、入会したいという方をできるだけ近いうちに、早くですね、御入会を求める、と。それから婦人会はだんだんと育てていかなきゃならないと思うんですね。育てて行くにはやはり会員意識を高めて行くという事が非常に大事だと思うんです。だからこれからの行事の中で、婦人会の会員である意識、婦人会というものに対する理解、それからもう一つは、何にしても善光寺の婦人会でございますからね、そこは世間一般の婦人会とは、ニュアンスも違いますし、目標も違う、そういうところに仏教の精神といいますか、仏佗の精神というものがいろんな形で、知らず識らずのうちにあらわれてくる。そういうものが必要かと思います。ですから、これからの私どもの希望するところは、婦人会の集会が定期に行われるということと、それから、会員意識という婦人会事業への協力、それからできるだけ、その活動に参加をして頂く、そういう意味で、婦人会の参加を呼びかけて、皆さんの求められる事をお寺側としては検討していく、という事で、婦人会をできるだけ盛り上げて行くことが大事かと思

うんですが。その方法として、先程、お話しが出ました史跡めぐりとかね、そういう風な事も方法として、積極的にとり上げて行きたいと。

伊藤　まだ、何んか、甘えの、ね、婦人会で、もう少ししっかりしないと、甘えて、ばっかりで。

なごりは尽きねど

中村　ね、この十五周年を期してね、またあらたに発足という気持ちで、充実させて行きたいと思いますね。

司会　発展をして頂きたいと思いますね。

星野　そして、その方向としましてね、このお三人の会長、副会長さんはね、この地域センターと言っては失礼ですが、人間センターですね。はっきり言えば、あの人を、あの地方ではあの方を、ひとつ中心にと、この地方ではこの方になってもらうというふうにですね、何人か人の中心が将来できて行きますと、そういう人達の連繋というか、連絡によりまして、地方人に小さな、この組織が誕生して行く。これを一つの、方法、じゃないかと思うんですがね。

司会　これから、組織作りと、それから適切な事業の展開。こうした点に、ご尽力をお願いすることに致しまして、善光寺さんの今後一層の発展を祈念します。